

平成 28 (2016) 年 11 月 28 日
在ベネズエラ日本国大使館
附属カラカス日本人学校発行

目指す児童生徒像 よく考える子 思いやりのある子 進んでやりぬく子 強くたくましい子 日本もベネズエラもよく知る子

カラカス日本人学校があったから 私たちは時と空間を超えて、会うことができたのです！ 20年前に在籍された宮永久美子先生から、ベネズエラのことを書いた本が届きました！

カラカス日本人学校をもっともっと知り、もっともっと好きになるために… (その138)
カラカス日本人学校はみんなの大切な、大切な宝物です！ NO. 33



昨年の創立 40 周年がきっかけで、世界中に「絆」が広がっていることは以前からお知らせしていることです。今回、創立 20 周年当時に教諭として在籍されていた宮永久美子先生 (1994 ~ 1996 年度在籍) から、先生が今年発行されました本「ここはヴェネズエラなんだ！」が送られてきました。(実はこの送付にも不思議な絆があります。宮永先生のお住まいの石川県にベネズエラのマラカイボから研修生としてピクトル君が来ていました。この本はベネズエラに戻るピクトル君に託されて、本校に届きました。) 本の一部を抜粋して、2回に分けてこの「アビラ」に紹介します。(写真：本の表紙。捕まえたナマケモノ。)

■ここはヴェネズエラなんだ！… (宮永久美子) ■ 1994 年 6 月 カラカス日本人学校は市内から車で約 30 分、治安の悪い市内を避けて、人里離れた山の中にあります。福田赳夫氏直筆による校札を掲げて全校 69

人が仲良く学んでいます。ここには「なまけもの」という動物がたくさんすんでいて、時々校庭に遊びにきます。お肉の臭いが好きでお弁当の時間になると、そのそと姿を現します。「なまけもの」の名前にふさわしく、本当の一本ずりのんびり動くんですよ。用務員のホセが捕まえて子ども達に見せてくれました。動きは鈍くて捕まえやすいらしいのですが、鋭い爪を持ち、おまけに体の毛の中に小さな虫がうようよいて、ちょっと抱く気にはなれません。おまけに肉はまずくて食べられないそうです。そのため、こうやって動きは鈍くても生きながらえているというわけです。私も参考までに触ってみましたが、毛がごわごわして毛皮のコーティングにも向かない代物です。なんの役にも立たない動物のようですが、別に害を与えるわけでもなくひょうきんな顔をして我々を楽しませてくれます。ちなみに、石を投げたり、棒でたたこうなど一人もいけません。

1994 年 11 月 12 月も近くなると、日本と同じようにデパートや商店、銀行などクリスマス一色の模様替えが始まります。イルミネーションに飾られた木々、ビル街、夜はカラカス名物のランチョの灯りと共に家々のクリスマスイルミネーションでとても華やかで、それはそれはきれいです。また、アメリカやカナダなどと違ってここはカトリックなので、サンタクロースよりも、ナシミアントといって、キリスト誕生を祝って三人の賢者が贈り物を持ってくる様子を表現した箱庭のようなミニチュア人形セットのようなものをツリーの下に飾ります。各家庭の格に合わせて思い思いの規模で飾られます。クリスマスの食べ物では、きわだってめずらしいものといえば、やはりアジャカです。ここベネズエラだけのクリスマス食品らしいのです。各家庭で味が違うのですが、お肉、干しぶどう、オリーブその他、各家庭好みの野菜を刻んだものをとうもろこしの粉をねっただものに練りこんでバナナの葉をちまきのようにしてぐるみ、紐でくくってあります。ちょうど日本で見るとまきを長方形にして大きめに似ています。15 分くらいゆで温かくして食します。このルーツはというと、ブラジルのフェジョアータと同じで、その昔、スペイン人が支配していた頃、支配されていたインディオたちがスペイン人の貴族達のクリスマスの食事の食べ残しをもらって、常食であったとうもろこしを混ぜて食べたのが始まりと言われています。レストランでも、「エル・プラト・デ・ナビダ」というアジャカセットのようなメニューがこの時期の季節メニューとして現れます。次に「パン・デ・ハモン・カリエンテ」。大きなバゲット型のパンの中にハム、オリーブそしてまた干しぶどう、これらのものが入っていて熱々のできたてを食べます。結構ボリュームがあります。これらの食べ物必ず食卓に並びます。1995 年 10 月 今年、カラカス日本人学校は創立 20 周年を迎えます。そのため、11 月 25 日 (土) の記念日に向けて、職員総動員で準備にあたっています。子ども達はその日に向けて「和太鼓」の発表のため、毎日ドンドコ、ドンドコと練習を始めています。何を隠そう、この私も 20 周年記念誌の編集長を仰せつかり、夜となく昼となく働いているのです。その企画の一つとして、学校全景と子ども達による人文字を、ヘリコプターを飛ばして撮影することになりました。さて、一筋縄ではいかないこのベネズエラのこと、どんなことになるのやら…。日本人会の会長さんの協力で、ヘリコプターをチャーターすることができました。ルイスというマネージャーのような人が学校に来てくれて、教頭と私とで貧弱スペイン語でなんとか飛ぶ日取りを決める事ができました。この日のために、児童・生徒会も積極的に動いてくれて、「20」の数字を人文字にし、運動場で手を振りながら待つことを申し合わせ、練習もし、すべてバッチリ。いつでもどうそとヘリを待っていたのでした。その日の朝、校長がヘリのため、そして、子ども達のために運動場の水撒きをちょうど終えた時、「ヘリのエンジンからオイルが漏れているので、今日は飛ばせない」と無情な電話。次に予定された日に期待をもって 1 週間待ちました。残念ながら、またもや、その日は天気が悪く飛びません。待つこと 3 週間。ついに、飛行にもってこいのお天気になり、半信半疑で運動場にて、紺色のヘリが太陽に輝いて近づいてくるのを発見。みんなで、ちぎれんばかりに手を振りヘリを迎え、無事、撮影を終えることができたのでした。こちらに住むと、忍耐力というよりは、「期待しない」とか「あきらめる」ことが上手になるようです。つづく

